

花 火

平成27年7月第4週放送

夏、全国で催^{もよお}される花火大会。
露店^{ろてん}がたちならび、綿菓子^{わたがし}やお面^{よそお}やヨーヨーなどを手にしながら、空に打ち上がる花火に見とれる、夏の装^{よそお}いの人々の笑顔。
そんな華^{はな}やいだ印象が、夏の花火にはあります。

けれども、そもそも夏の花火には、亡き人を悼^{いた}む追^{つい}悼^{とう}や鎮^{ちん}魂^{こん}の意味合いがあるのです。

江戸時代、大飢饉^{だいききん}とコレラの流行によって、多くの死者が出た享^{きょう}保^{ほう}十八年（一七三三年）、八代将軍徳川吉宗が、七月に隅田川^{すみだがわ}で行った死者を追悼する法要の際に、花火を打ち上げました。

これが、現在も行われている隅田川花火大会の由来です。

追悼や鎮魂の意味をこめた花火大会は、隅田川だけではありません。

たとえば、新潟県長岡市での花火大会は、毎年八月二日・三日の両日に行われますが、それに先立ち、八月一日の午後十時三十分、白菊^{しらぎく}という名の花火を打ち上げます。

これは、昭和二十年の長岡空襲での犠牲者の追悼のため、空襲が始まった日の同じ時刻に打ち上げる供養の花火です。空襲で亡くなった大勢の人々へ、空に咲く大きな白い菊を手向けるのです。また、長岡市は新潟中越地震も経験しています。空襲の犠牲者とともに、地震の犠牲者を追悼し、復興への願いもこめられていることでしょう。

その他、仙台七夕花火をはじめ、全国各地で長岡市と同じように、戦没者や地震・災害の犠牲者を追悼する鎮魂の花火が打ち上げられています。

これらの花火大会の多くが、お盆前後に開催されるのは、亡き人を悼む意味合いを、より強めているといえます。

私たちが、亡き人の墓前^{ぼぜん}に美しい花を供^{そな}えるように、空に美しい大きな光の花を供える。これが、夏の花火にこめられた思いなのでしょう。

また、七十年前、第二次世界大戦が終ったのも夏です。夏の花火には、「平和」への思いもこめられていると思います。

「みんなが爆弾なんかつくらなくて、きれいな花火ばかりつくっていたら、きっ

と戦争なんて起きなかったんだな……」

花火をこよなく愛した、放浪の画家、山下清が、長岡の花火を見ながら語った言葉です。

今年も、夏の花火が、空に開きます。

— 終 —